

## 送 辞

例年に比べ積雪も少なく、穏やかであった冬も終わりを告げようとし、教室の窓から差し込む日差しにも、暖かな春の訪れが感じられる季節となりました。

かくもよき日に卒業生の皆様が、ご卒業を迎えられましたことを、在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

先輩方はこの高志高校での三年間をどのような思いで振り返っておられるでしょうか。

新型コロナウイルス感染症の影響による未曾有の事態の中、思い描くような高校生活を送ることが困難だったと思われかもしれませんが、そのような中でも先輩方は普段の学校生活や学校行事の中で、今できることに全力で取り組んでいらっしやいました。その熱意や思いは私達在校生へと伝わり、やがて学校全体を巻き込み苦境をものともしない学校を作り上げていきました。そのような先輩たちとの思い出の中でも特に印象深いものは、やはり部活動と学校祭です。

部活動では感染症の流行や記録的な猛暑により制限が課される中、短い時間の中で仲間と切磋琢磨し続け、飽くなき向上心を持ちながら、一步、また一步と実力を高めるために努めていらっしやいました。目標に向けてひたむきに努力する先輩方の背中には、私達在校生の目指すべき姿であり、今でも大きな励みとなっています。

学校祭ではフェニックス祭から文化祭、体育祭にかけて、色ごとに、時にはその色を超えて様々な工夫をこらし、いかに生徒全員が全力で楽しむことができるかを考えながら活動していらっしやいました。3色で競い合いながらも、生徒全員で笑いあい、ときには涙を流すという先輩方が作り上げた学校祭の姿は、まさしく「高志の坩堝」でした。

他方で、毎日遅くまで教室や自習室で必死に勉強したり、進路支援室の前のスペースで先生に自主的に質問したりされている先輩方の姿がありました。そのひたむきに努力する姿を目にし、進路志望を実現することの厳しさだけでなく、夢に向かって常に努力をし続けることの大切さを学ぶことが出来ました。

私達在校生は、先輩方の思いや築き上げてきた高志高校の伝統を受け継ぎ、さらに発展させる覚悟であります。

さて、昨今の社会情勢はますます厳しさを増し、日本は激動の時代を迎えようとしています。これから歩いていく道のりにおいて、挫けることなく、まっすぐに歩み続けることは容易ではないでしょう。先輩方が本校で乗り越えてきた苦難や葛藤、そして仲間たちと笑いあい、ともに泣いた経験は、その道を歩む上で大きな助けとなることと思います。

16世紀から17世紀にかけて活躍したイングランドの詩人、ジョン・ダンが残した言葉の一つに、「no man is no island」というものがあります。これまでに幾度か聞いたことのある言葉かもしれませんが、「人は誰も孤島ではない」というのが直訳であり、「人は一人では生きていけない、人は持ちつもたれつ」というように解されています。この先、困難なことや、孤独だと感じることもあっても、必ず水面下で思ってくれている、本校で出会った友人、後輩、先生方がいます。時には頼り、また時には頼られることで、これまでに培ってこられたその繋がりが、必ず道を歩いていくための糧となり、時には道しるべとも、救いの手ともなることと思います。この高志高校での思い出と繋がりを生涯の宝とし、未来を切り開いていってください。

最後になりますが、本校の校訓である克己・創造・敬愛の下、培ってこられた高い志を持ち、自分の信じた道を、疑うことなく日々一歩、一歩、前へと進んでいってください。

卒業生の皆さまがますます光り輝き、ご活躍されますことを、在校生一同心よりお祈りし、送辞といたします。

令和六年三月一日

在校生代表 内藤 大樹